

戦後女性詩にみるセクシュアリティのトラウマと山姥の表象：吉原幸子と白石かずこを軸にして

著者	真野 孝子
著者別名	MANO Takako
ページ	1-194
発行年	2020-09-15
学位授与番号	32675乙第246号
学位授与年月日	2020-09-15
学位名	博士(文学)
学位授与機関	法政大学 (Hosei University)
URL	http://doi.org/10.15002/00023446

博士学位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	真野 孝子
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	第 740 号
学位授与の日付	2020 年 9 月 15 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(2)該当者(乙)
論文審査委員	主査 教授 中沢 けい 副査 教授 藤村 耕治 副査（学外）一般社団法人 国際メディア・女性問題研 究所所長，元城西大学学長 水田 宗子

戦後女性詩にみるセクシュアリティのトラウマと山姥の表象
— 吉原幸子と白石かずこを軸にして

論文目次

序論 本論文のテーマと方法論

はじめに

吉原幸子と白石かずこを研究対象とする理由

フェミニズム文学批評による読み

トラウマとセクシュアリティの関係と 詩という表現へ

本論文テーマ

第一章 傷の原風景 — グロテスクのイメージ

第一節 吉原幸子 — 『幼年連禱』

詩の背景「くらい森」「人さらい」悪魔祓いの失敗とサバイバル Edge

第二節 白石かずこ — 『卵のふる街』『虎の遊戯』

詩の背景「ライオンの鼻歌」「卵のふる街」とグロテスクーキリコの絵

『虎の遊戯』The Feminie Mystique

「男根（Penis）スミコの誕生日のために」から「聖なる淫者の季節」へ

第三節 大庭みな子の山姥の原点 — 「林」

山姥以前 — 山姥の萌芽

第二章 傷の原風景の展開 ― ト라우マの物語

第一節 吉原幸子 ― 『夏の墓』『オンディース』『昼顔』『夢あるひは』

詩の背景『夏の庭』『オンディース』『昼顔』『夢あるひは…』

「泣かないで」母から娘へと伝わる山姥性

第二節 白石かずこ ― 『聖なる淫者の季節』

都市とモダニズムと女性の関係性とトラウマ

The Waste Land 聖なる淫者の季節

第三章 傷の原風景からの生き延びへ ― 山姥の語り

第一節 吉原幸子 ― 『ブラックバードを見つけた日』

『樹たち・猫たち・こどもたち』『発光』

詩の背景『ブラッグバードを見た日』『樹たち・猫たち・こどもたち』

『発光』

第二節 白石かずこ ― 『砂族』『浮遊する母・都』

詩の背景 「聖なる淫者の季節」「My Tokyo」から

『砂族』『砂族の系譜』へ

『砂族』『浮遊する母、都市』

第4章 山姥という表象 ― 女性のトラウマからの生き延びとして

第一節 大庭みな子の「林」と『山姥の微笑』:母と娘の関係に見るメビウスの環

第二節 世代による山姥のエクリチュールとその継承

石垣りん 伊藤比呂美 山姥の表象と老いの哲学

第三節 茨木のり子の詩にみる独立精神性 ― 山姥への道のり

詩集『歲月』

終章 論文テーマに対する結論と展望

まとめと結論

課題と展望

「なんみん、三匹のキツネが通る、ローファント通り」

おわりに

初出一覧

参考文献

謝辞

1、論文の概況と意義

詩歌は儒教的な世界観をもつ東アジアにおいて、キリスト教文明の「祈り」とほぼ等しい意義と価値を持つものであり、東アジアの精神世界形成の支柱であると言っても過言ではない。儒教的世界観及びその影響を著しく受けた仏教的世界観が広がる東アジアはそれぞれの国情の中で、詩歌の世界を構築してきた。

日本もまた例外ではない。詩歌によって構築された精神世界とその情緒は、社会の安定と秩序をもたらすために必須のものであった。日本の開国による近代化はキリスト教文明との出会いとその受容は日本社会にもたらした。そしてそれは詩歌の世界の変革をも要求するものであった。伝統的な和歌は短歌と呼び変えられ、やがて新感覚の短歌を生んで行く。短歌と並ぶ定型短詩である俳句も改革の波に晒された。また近世までは、武家を中心として需要された漢詩は、市中の一般の人々にも広く享受され、明治期には多くの漢詩が書かれた。欧州の文学の翻訳として紹介された口語自由詩が多数の読者と雑誌投稿者を生み出すのは、これらの伝統的な詩歌の変革と改革のあとを追うかたちで登場する。その背景には従来型の結社を中心とした伝統詩歌の世界とは一線を画する雑誌出版の興隆が見られる。口語自由詩の投稿欄を持つ雑誌は大正期に入ると全国に販路を持ち、多くの投稿者を生み出す。近代化の影響は衣・食・住の生活細部におよび、職業生活、家庭生活における情緒も伝統的な定型短詩だけでは表現できないものとなっていた。

真野孝子氏の論文「戦後女性詩にみるセクシャリティのトラウマと山姥の表象 吉原幸子と白石かずこを軸にして」は20世紀初頭の日本の出版文化興隆とともに発展したモダニズム芸術流行の中で登場した女性の口語自由詩の書き手として林芙美子、左川ちかをあげる。そして第二次世界大戦をはさんで登場した永瀬清子、石垣りん、茨木のり子を戦後の第一世代とする。1950年代後半に登場する吉原幸子、白石かずこを戦後の第二世代とする。吉原幸子、白石かずこが詩人として頭角を現した1960年代は口語自由詩の詩人が男女を問わず数多く登場した豊穡な実りの季節であった。吉原幸子、白石かずこが詩人として活躍した1960年代は近代から現代における口語自由詩の頂点のひとつと数えることに異論が少ないであろう。口語自由詩を書く戦後第二世代に当たる女性詩人の吉原幸子、白石かずこを論文の主軸とする充分な理由がそこにある。

林芙美子、左川ちかはモダニズム流行の中で人間感情の内面を発見し、内面の吐露を詩に託する。内面を直接に語る告白からさらに進んでメタファーやイメージに依拠する詩表現を開拓した。1945年の第二次世界大戦終了時にすでに成人の年齢に達していた瀬永清子、石垣りん、茨木のり子は、戦後社会での女性の自立と自律的精神をしなやかさと強靱さの両面を持つ表現によって深い矜持のもとで歌いあげた。瀬永清子、石垣りん、茨木のり子の詩が現代においても多くの読者を持つのは、生活者としてのリアリズムに支えられた表現の強靱な響きをその詩が持っているからであろう。

それに対して第二世代の吉原幸子、白石かずこは内面世界を日常生活の感覚が及ばない暗喩的世界まで掘り下げて行く。そこには物語化を拒むトラウマがあると真野論文は仮定

する。トラウマは文明の抑圧によって生じた傷であり、個々の事情を越えて社会的に共有されている傷である。トラウマに触れるためにメタファーやイメージと言う言語表現の技術が縦横無尽に駆使され、詩は難解さが魅力となるまでに磨き上げられている。吉原幸子と白石かずの詩を真野論文は、水田宗子によって打ち立てられたフェミニズム文学批評の方法によって読み解いて行くものである。

1960年代に訪れた口語自由詩の豊穡な実りの時代は、これまで文学研究の対象とされることが極めて少なかった。その時代に口語自由詩に価値が乏しいから研究されなかったのではない。モダンからポストモダンへと転換する時代のある頂点として過剰なほどの内容を持つために、研究対象としての糸口を見出すことさえ困難であったと言うべきであろう。水田宗子のフェミニズム文学研究に依拠する真野論文は60年代という豊穡な時代を文学研究の射程に入れるための端緒を開く重要な役割を持つものだ。

2、トラウマとしての原風景とグロテスクのイメージとその後の展開

吉原幸子と白石かず子の出発点と展開

ヨーロッパに生まれた近代文明は男女の性に対する抑圧をその底に秘めていることが指摘されるようになったのは1960年代以降である。文明による性の抑圧現象は、精神分析学の用語を借用してトラウマと呼ばれる。付言すれば精神分析学は1919年の第一次世界大戦終了から1939年の第二次世界大戦勃発までの戦間期に発達した学問分野であり、モダニズムの興隆と軌を一にしている。男女の性にたいする抑圧の研究は、やがて男女の性別の違いとされるものが生物学的差異ではなく文化的に形成された差異であるとするジェンダー論の構築につながる。

1932年生まれの白石かずこ、1931年生まれの吉原幸子の幼年期は戦間期のモダニズム興隆期にあたる。第二次世界大戦終了時にはまだ小学生であった。初等教育は戦中の教育を受けているが、中等教育から高等教育は戦後的価値観の中で受けている。戦争による価値観の断絶の影響を激しく受けた男性詩人にくらべ女性詩人は、戦前から戦後へと継続的なモダニズムの影響を受けていると真野論文は指摘する。戦争中のほうがより女性の生活は近代化したきらいもある。

吉原幸子「幼年連禱」(歷程社1964年) 白石かずこ「卵のふる街」(協立書店1951年)「虎の遊戯」(世代社1960年)の初期作品を真野論文は「傷の原風景を読み解くにふさわしい」とする。「吉原はその作品において傷を生々しくかつ痛々しくアクチャリティを持って表現している。白石はシュールで自虐的ブラックユーモアにおおわれているが、詩の声を深くたどっていくと、痛々しい傷が見いだされる」との比較がなされる。

吉原幸子は幼年期の原風景を「暗い森」と表現する。真野論文では吉原幸子の「暗い森」はグロテスクなものであるとされる。グロテスクは無秩序と混沌を含んでパーソナルを飲み込もうとする闇だ。白石かずこはトラウマの原風景を密林の喪失とする。密林、つまりジャングルである。ジャングルの王者として存在した鬘を持つライオンであった「私」の鬘は飛び去ってしまう。ジェンダーに取り込まれる以前の私が、社会的規範としてジェンダーの

文脈の中に取り込まれて行く痛みが「ライオンの鼻歌」（「卵のふる街」所載）にユーモラスに歌われている。「虎の遊戯」に登場する「虎」はパーソナルなテリトリーへ無作法に侵入する男性というジェンダーを象徴している。

森と密林の違いは吉原と白石の幼年期の生活の違いがもたらしたものである。吉原は幼年期に出生の秘密を抱え、出生の秘密は母との関係を濃密なものとした。カナダのバンクーバーで生まれた白石は人生を回顧し詩作的観点から描いたエッセイ「黒い羊の物語 *Personal poetry history*」（人文書院 1996年）で「（中略）バレンタインにイースター、ハロウィーン、ロビンの啼く声、気が付くとシャーベットになった牛乳瓶のクチ。こうしたものがわたしの詩の原風景になり」と幼年期に幸せゆえに凡庸な日々があったことを明かす。白石かこの幼年期には樂園が存在したことは注目に値する。白石が太平洋戦争勃発によって日本へ送還されるのは7才になる2月の誕生日の直前だ。戦禍を避け松山へ疎開した白石は異質な文化の中で育ったパーソナルの持ち主として「黒い羊」となる。

吉原幸子と白石かこの幼年期に受けた傷の原風景としてのトラウマを詩作によって描く。真野論文は二人の詩人が文明のトラウマを詩作品に彫刻して行く過程を、個人的体験に還元してしまわないように細心の注意を払っている。そして、ここに補助線として創作の初期から山姥というイメージを持っていた同年代の小説家の大庭みな子を登場させる。大庭みな子は初期の詩作品「林」で山姥のイメージを用いている。

パーソナルな経験を探りながら、文明が持つトラウマを作品化する作業は、無意識の底に沈んでいる傷の痛みを自覚されたものとし、作者はトラウマからの寛解を得ることもある。しかし、意識化と言語化は危険を孕んだ作業となることも珍しくない。個人の体験に潜んでいるトラウマを、文明のトラウマへと言語表現によって切開く作業は時には作者に精神的破綻をもたらす場合もある。それが作者の自殺という結末を導くケースも存在する。パーソナルな体験を文明が持つ根源的なトラウマの表象として昇華する作業は生命の危険を伴う作業であり、そこから作者は「生き延びるため」の何かを探し出さなければならない。真野論文では補助線として創作の初期から「山姥」のイメージを持っていた大庭みな子を登場させることで、吉原、白石が文明のトラウマと向き合う危険から「生き延びる」ことを暗示する。

トラウマは詩人にとって表現の源泉となる。真野論文第二章「傷の原風景の展開　トラウマの物語」冒頭で真野孝子は二人の詩人の仕事を以下のように要約する。

「吉原の場合は自己の内部、深層に向き合うことによって、自分自身を見つける行為が詩を生み出す原動力となった。そこには性の課題が深くかかわっていて、吉原はレズビアン自分という女を見出してゆく過程であった。すなわち、性的異端者としての意識と向き合うことになる。白石は異邦人としての意識を持ち続けてきた。性においても家父長家族の中の女から逸脱する自分の性を自覚するのであった。居場所を書いてでも一対一の恋愛関係でも日本でも？ない。吉原のペルソナは傷ついた被害者、あるいは、傷つける加害者という性質を帯びている。一方、白石のペルソナは性的放浪者といったものである。両者とも、その

ペルソナには異端者という共通性が認められる。そしてその語りはトラウマの物語となっていくのである。」

吉原幸子と白石かずこは、内面の奥底に沈んだトラウマを発見し造形し、メタファーとイメージを駆使したトラウマの物語を紡ぎ始める。吉原幸子「オンディース」(1972年 思潮社)「昼顔」(1973年 サンリオ出版) 1974年には「オンディース」と「昼顔」で第四回高見順賞を受賞した。白石かずこは「聖なる淫者の季節」(思潮社1970年)でH氏賞を受賞。「一層のカヌー、未来へ戻る」(思潮社1978年)で無限賞を受賞。以後も「砂族」(書肆山田1982年)で歷程賞授賞。「現れるものたちをして」(書肆山田1996年)で高見順賞と読売文学賞を受賞。「浮遊する母、都市」(書肆山田2003年)で土井晩翠賞を受賞。「詩の風景。詩人の肖像」(書肆山田2007年)では二度目の読売文学賞を随筆、紀行部門で受賞するなど高い評価が続いた。

真野孝子はこれらの作品群を水田宗子が打ち立てたフェミニズム文学評論の方法論によって読み解き、現代詩を読みと説くための手法とする。これにより難解であるとされる多数のメタファーと多様なイメージを持つ現代詩へのアプローチの端緒が開かれている。

3、傷の原風景からの脱出と山姥というイメージ

吉原幸子、白石かずこはいずれも異端者であった。いや、積極的に異端者としての世界を自己の内面に切り(本ページ下から8行目参照)開いて行く。それが二人の女性詩人を精神の破綻と危機から救出し、さらには、内面に複雑なイメージの世界を展開させる。吉原幸子は晩年に至り、自己の母との緊張関係をほどこ、時空を超えた同一の感覚を広げて行く。フランス語の海を意味する「ラ・メール」の中に「母」が隠れているとモダニズムの言説の中で繰り返し唱えられた発想を吉原幸子は母との緊張関係からの解放として新たに歌い直し、そこに新鮮な詩の声を響かせる。これは日本の詩歌にとってフランス象徴詩受容の成果の頂点を示すものであると言えるだろう。

一方、白石かずこは、70年代東京の都市に光景にモダニズムの爛熟を見る。モダニズムが爛熟から衰退へと変化するなかで、白石の詩は砂漠へと向かう。通常、無味乾燥、情緒の届かない世界とされている砂漠を白石かずこは日本語の詩的な世界として展開させる。植物が生い茂る温帯の湿潤な気候の中で「祈り」に匹敵させる詩歌の情緒を育ててきた日本語の世界に砂漠の情緒を切り開いたのである。都市は砂漠という通俗的な嘆きのイメージを、反転させ、砂漠こそ「われわれ」が向かうべき世界の方向であると、詩人は高らかな歌の声を響かせる。

真野孝子は吉原幸子が「海の山姥」であるのに対して白石かずこは「砂漠の山姥」と呼ぶ。真野論文第四章「山姥という表象 女性のトラウマからの生き延びとして」で以下のように総括する。

「第一章の傷の原風景では詩表現が言葉では表現できない内面の吐露となるので、グロテスクなイメージに託されることを読み解いた。第二章の傷の原風景の展開になると、詩の

語りは「わたしたち」や他者についてのトラウマの物語に変遷していったのである。傷の原風景において、山姥という表象は、大庭みな子の「林」に見られるように、傷から回復、自己解放への願望の語りを担う像としての重要なものなのである。彼女は小説「山姥の微笑」で、家族に封じこめられて、娘・妻・母という役割をこなしながら、自由な自分への願望を、里の人間社会を離れて思いのままに本来の自分の姿で生きる山姥になぞらえて生き延びる主婦の内面の二重構造について描いている。そしてトラウマの物語を始めるときに、山姥は自己の本来的な姿への憧憬を担う存在というメタファーとして内面の語りを担う存在となっていた。さらに第三章の傷の原風景からの生き延びにおいては、詩の声が山姥の語りに重ねられるようになる」

以上の引用にみられるように、真野孝子は、吉原幸子、白石かずこが、内面に発見したトラウマを源泉とする詩（うた）をうたうにあたり、精神と生命の危機から逃れるための装置としての「山姥」という表象を提出する。山姥のイメージは、水田宗子が大庭みな子の作品を解説するための使用した中心的概念である。山姥は人里離れた山にあって、自由な自己を持つ。人里の異端も、山姥が生きる山にあっては、当然の存在であり異端ではない。真野論文は吉原幸子、白石かずこの詩作が異端の歌から山姥の歌へと発展展開する過程を水田宗子のフェミニズム文学批評の手法を応用しながら読み解いて行く。

4、吉原幸子と白石かずこの前後の世代との比較

吉原幸子、白石かずこに先行する戦後の女性詩人第一世代である永瀬清子、石垣りん、茨木のり子は、リアリズムの手法を用いて、女性の個人としての自立をうたう。そこでは自己と他者の社会的距離間は厳密に計測されている。自己と他者の距離の厳密な計測こそ詩の重要な核心をなしている。戦後第一世代の女性詩人が現在でも多くの読者の共感を得るのは、社会生活における自己と他者の距離の計測の見事さが、読者に共感と感銘を与えるからだと言えるであろう。この世代の詩人にとって内面は社会的距離を厳密に計った中心点に存在する個の沈黙によって表現される。語らないことこそ、詩の重要な中心点であり、語らないことから矜持が生まれ、詩作品全体に響く矜持の音色が読者の耳に美しく響く時、詩人の沈黙は読者の耳の中で実に多くの事柄を語り出すのである。

個の沈黙の中に沈んだ内面のトラウマを造形化し言語芸術の高みまで引き挙げたのは戦後女性詩人の第二世代にあたる吉原幸子、白石かずこであったことは真野論文の中核をなしている。そこでは近代という時代が構築した文化的規範が脱構築されている。内面は発見され、観察され、拡張され、個の中にありながら全世界を包摂するまでになる。伝統的な定型短詩にはなしえない大事業をなしえたことになる。

吉原、白石の後続世代にあたる伊藤比呂美は近代化のプロセスの中で形成された娘、妻、母という女性のジェンダーが負わされる役割分担の制度が解体した後に登場した詩人である。伊藤比呂美は生まれる、育つ、交わる、生む、育てるという営みを身体的実感にひきつけて大らかに歌う。子であること、交わる相手を持つこと、子を産み育てることは、身体的経験とイマジネーションの交点で響く多層的な音の集積を形作っている。個人の身体感覚

は社会制度が要求する道徳を軽々と越えて行くのだ。日本語を使う人々の情緒の底に日本仏教があることを見て、詩の語り方として仏典と説教節の再導入が行われていることを真野論文は指摘していないが、詩が社会の集団的な精神形成にとって重要な役割を果たしていることを考慮すると、この審査報告書ではそれを付け加えておきたい。吉原、白石が開拓した内面世界にひろがる広大な世界を、伊藤比呂美は日本社会において共有された仏教的世界観を持つ言葉と語り口の中に置きなおすことによって、共有されるべき情緒の再構築を図る。脱構築から再構築への動きをそこに見るのはまちがいだろうかと考えるのは主査（中沢）が、真野論文に即されて始めた思考の一端である。

5、結論と今後の展望と課題

1960年代は日本の口語自由詩にとって男女を問わず豊穡な実りの時代であったことは間違いない。欧州の戦間期に生まれたモダニズム、シュールリアリズムは、ほとんど同時に日本へ輸入され、二十世紀初頭に広がった詩作の態度が、戦禍を潜り、定着し花開いたのが60年代から70年代にかけての口語自由詩である。もともと第一次世界大戦をきっかけとして生まれたモダニズムやシュールリアリズムであるから、第二次世界大戦の戦禍を潜ったことは中断あるいは断絶として捉えるよりも、理論先行の芸術論、詩論に戦禍という体験が加わったとみるほうが实际的なのではないだろうか。理論を体験として追加すると言うには、戦死者、戦争犠牲者、戦争被害と敗戦の苦痛が多大であったことを認めざるをえない。そのうえで、戦後女性詩はモダニズムの継続と復活という性格を持っていることを指摘した真野論文の意義は大きい。この点は先行研究が乏しいなかで、真野論文がこの時代の詩研究の嚆矢となる重要な論文であることを証明している。詩を研究対象とした先行論文が少ないうえに女性詩の研究はさらに論文は乏しい。真野論文はこのような状況に対して新しい言説空間を開く力を持っている。

真野論文が書かれるにあたっては水田宗子のフェミニズム文学批評の方法論に寄るところが大きい。とくに大庭みな子作品から抽出した山姥のイメージは真野論文の中核となっている。山姥という概念がトラウマからの脱出と現代社会において精神が生き延びるための表象として機能することに捕らわれ、山姥とは何か？という分析に乏しいことは惜しまれる。山姥という表象に頼りすぎずに、さらなる分析と探求が望まれる。キリスト教を根底に持つヨーロッパ文明には「魔女」が登場し、実際の社会でも魔女狩りの惨劇を生んでいるが、山姥にはそうしたイメージによる惨劇はなかったのか。また山姥は鬼女と同一視されるかもしれないが、鬼女と山姥の違いについても詳細な検討が求められる。これは吉原幸子作品、白石かずこ作品を読み解くうえでも重要な論点となりうる。「詩論出でて詩滅ぶ」とは古典時代からくり返し言われていることであるが、詩論がなければ詩も新しく更新されないのである。「詩論出でて詩滅ぶ」とは詩の死と再生を含んでいる言葉だと捉えれば、六十年代の口語自由詩は、今後、大いに研究されるべき分野である。博士論文審査口頭試問において真野孝子氏の学識は博士の称号にふさわしいと確認された。また真野論文は博士号授与にふさわしいものと認められることを報告する。